



天文 3 (1534) 年銘阿弥陀一尊種板碑

元占春園造立筑波大学所蔵板碑（天文3年銘阿弥陀一尊種子板碑）

板碑は追善供養塔や逆修供養塔など墓塔として13～17世紀にかけて日本全国で非常に多く造立された。その中でも緑泥石片岩製の武蔵型板碑は関東地方を中心に分布していたことが知られている。

本学では無紀年銘資料を含め13点の武蔵型板碑を所蔵している。紀年銘として康暦2年（1380）～天文3年（1534）の年号が刻まれている。これらの板碑群は東京都文京区大塚一丁目、旧東京教育大学構内の占春園やその周辺に造立されていたと言い伝えられているが、造立していた位置や所蔵時期については明らかになっていない。

この13点の資料の中で唯一銘文の部分に金箔と黒漆と思われる痕跡を観察できたのが天文3年（1534）銘阿弥陀一尊種子板碑である。紀年銘の「五」、被供養者名の「仙」に金色の付着物が、蓮座の一部に接着剤として使用されたと思われる黒色の付着物が残る。

金色の付着物は金泥もしくは金箔であると考えられる（朽津2010；朽津2011）。本資料の場合、金粉粒子というよりも金の表面が膜状になっているように見えることから（野中1997）、金泥ではなく金箔が使用されていると推定される。また黒色の付着物はその上に金箔がのっていることから、接着剤として想定されてきた黒漆（野中1997；朽津2010；朽津2011）の可能性が高いと思われる。

鈴間 智子

朽津信明 2010 「板碑に見られる彩色について」『月刊考古学ジャーナル』602

朽津信明 2011 「葛西城址出土板碑に認められる彩色の分析」『葛飾区郷土と天文の博物館紀要』12 61-65頁

野中 仁 1997 「板碑に残る金」『埋文さいたま』27

板碑の写真は筆者が撮影した。また拡大写真は（株）キーエンス製デジタルマイクロスコープVHX-2000による。